

フランス語

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

2023（令和5）年度共通テストの「フランス語」は、2020年まで実施されたセンター試験の枠組みを受け継いだ2021年からの「共通テスト」を踏襲し、『筆記』試験を課し、リスニングテストは実施しないという方針の下、作成、実施された。

共通テストになって3年目の今回のテスト結果は、受験者93名（前年度102名）、平均得点は100点満点換算で65.86点（同56.87点）、最高100点、最低20点（同99点、15点）であった。昨年度の平均点『センター試験』を含めて過去最低、5つの外国語の中でも最低点』からは上回ったが、依然としてセンター試験時代のレベルではない。（センター試験時代のフランス語平均点の、最後の5年間の平均を算出すると70.55点になる。）

出題形式については、昨年度のそれを踏襲している。第1問は発音問題、第2問は「書き換え」問題、第3問は文法問題、第4問は語彙の知識を問う問題、第5問は対話文完成問題、第6問は整序作文問題である。第7問は資料読み取り問題でA、Bに分かれての出題形式であり、いずれも実際の運用場面を想定した問題である。第8問は読解力が問われる長文問題である。

今年度のフランス語共通テストは、基本事項を丁寧に問う工夫のある問題で、発音、語形変化における不規則なものについても、中等教育レベル内から出題された。またフランス語の運用能力を幅広く問うという点でも、共通テストのねらいを体現した出題であったと評価できる。

報告の方針

今回の報告は、上記の点を踏まえ、次の4点を分析の中心とする。

- (1) 受験者の実力差を判定できる試験となっていたか。知識があり、深く考えた結果、不正解になってしまうことがないか、ということの特に関心したい。少人数の集団が対象であるだけに、その点に関しては大人数の科目以上に要求が強くなるが、御理解を賜りたい。
- (2) 特定の要素に偏らない、総合的な学力を問う問題であったか。
- (3) 高等学校の学習範囲から逸脱しない問題であったか。
- (4) フランス語圏滞在経験などが解答の可否に大きく影響していないか。

なお、評価に当たっては、14ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内容・範囲など

フランス語を高等学校から選択学習する高校生の学習環境を考慮した問題作成を希望している。主な形式と内容は共に昨年度の共通テストを踏襲したものであった。

第1問 フランス語におけるつづり字と発音間の規則性を理解しているかを問う問題である。今回も基本ルールを問う問題に限られ、こうした傾向が続くことを望む。

問1 語末-ctの発音を問う問題。respectと同様、例外的に発音しないものとして記憶すべき例。

問2 -g-の発音を問う問題。-gn-の発音の基本を思い出せば難しくない。英単語のignoreとの違いを指摘する注意喚起問題とも言える。

問3 -ein-の発音を問う問題。音節の区切り方を間違えなければ難しくない。

問4 語中の-e-の発音を問う問題。これも音節の区切り方のルールを知っていれば正解に行き

着くし、語彙も基本的なものであるので難しくない。

問5 etの後ではリエゾンをしてはならないという基本ルールの確認問題。リエゾンが必要な選択肢もいずれも基本的な例。

第2問 発音に加えて、形容詞の変化、派生語の知識、動詞の活用などを扱う単語レベルでの総合的な文法問題である。

問1 形容詞の女性形を問う問題。et→etteが普通で、et→èteは少数に限られるので、後者を記憶しておくべきであろう。

問2 動詞の対義語を問う問題。英語の類推からも正答を選べる。

問3 形容詞から名詞への変化を問う問題。これも英語の類推が可能な単語である。

問4 動詞から名詞への変化を問う問題。基本語であるが、選択肢に語末が-anceの単語が含まれていれば迷うところか。

問5 形容詞から動詞への変化を問う問題。英語の類推からも、-t-を含まない選択肢を誤答する可能性は少ない。

第3問 文中の空所に適語を入れる形式で、文法や語法の理解度を測る問題である。

問1 autour de～という語法を考えれば、①、②に絞られ、autour de～が前置詞句であることから①は排除される。

問2 受動態の動作主を導く前置詞を問う問題。parとdeの違いは必ず授業で言及される事項なので、難しくない。deの後の部分冠詞の省略も問われた。

問3 à part～あるいはà part çaという連語の知識を問う問題。消去法でも解答は可能か。

問4 未来完了の意味をもつ前未来形の用法を問う問題。単純未来形との組合せは基本的であり、難しくない。

問5 形容詞の最上級の形を問う問題。「最も～な人の一人」という表現は定型表現であり、①を選ぶ可能性は少ない。

問6 前置詞の意味を問う問題。「いつから？」という文意が分かれば難しくない。

問7 vouloir queの後では接続法が要求されるという基本知識を問う問題。

第4問 引き続き、文中の空所に適語を入れる第3問と同じ形式。語彙の理解度を測る問題に特化している。

問1 n'avoir rien à voir avec～という表現の知識を問う問題。Ça ne me regarde pas. などの表現を知っていると更に迷うことから、少々難しい。

問2 au sens propreという表現の知識を問う問題。sensの多義性を生かした点は評価できるが、この例文に合うのはau sens propreではなくてau sérieuxではないか。au sens figuréと対になるべき表現を知るには、かなりフランス語の文章に読み慣れている必要があり、高校生には難しい。

問3 à bord de～という表現の知識を問う問題。基本語句であり、消去法でも正答に行き着く。ただ、「飛行機搭乗の際のはさみ持ち込み禁止」は、高校生活を丸々3年間コロナ禍で過ごした今年の受験者達にとって、一般常識でない可能性がある。海外渡航にしろ国内旅行にしろ飛行機搭乗経験が、例年とは比べものにならないくらい少ないからである。

問4 動詞の意味を問う問題。③と迷う可能性はあるが、正答を選ぶのは難しくない。

問5 名詞の意味を問う問題。directionの多義性を生かした問題とも言える。②の誤答はありうる。

問6 動詞の意味を問う問題。選択肢はいずれも基本語であり、選択に迷うとはいえ難しくない。「prévenir + (人) 直接目的語」の構文への注意喚起になった。

第5問 対話文を完成させる問題であり、4技能の総合的な育成が求められている中で、会話体の出題にもますます工夫がされていることと推察する。

問1 l'が指示する名詞を考えれば、正答に行き着く。状況設定も高校生にとって分かりやすい。

問2 ③がまず排除され、代名詞のluiに注目すれば、正答に行き着く。

問3 「心配しないで、案内してあげるから」という返事に合う台詞を考えていけば難しくない。

問4 「ありえない」という台詞だけではなく、後続の「彼女はもう僕と話したがないんだ」という言葉まで考えれば、正答に行き着く。インターネットを利用したやり取りがおそらく中心であろう今の高校生にとって、appelerというのは少々違和感がある可能性はある。

問5 これも最後の台詞まできちんと読むことで正答に行き着く。使われている単語も、状況設定も理解しやすい。

第6問 整序作文。和文仏訳で、自らの考えを述べる自由作文の前段階として、文法や構文を中心とした作文力を問う問題である。並べ替えの語(句)の単位は6個、問うのは4番目の語(句)というルールで統一されている。日本語とフランス語の間の発想の違いが問題のポイントになると難易度が上がる。文頭と最後がフランス語で示されることで、出題ポイントがはっきりするこの形式の継続を望む。

問1 faillirの後にdeが必要かどうか、迷う可能性もあるが、文の後半でdeを使うことが分かれば難しくない。

問2 ここでもtenirの後の前置詞がàかdeかで迷う可能性があるが、後半のremercierに続くのがdeであることに思い至れば結論が出る。正答率も低く、難しいとはいえ、よく考えられた問題である。

問3 強調構文の理解と、強調部分が理由節であることの理解が必要である。理由節の主語がcelaであることは、日本語の文からは導けないので、こうした物主語の文に慣れていないと戸惑う問題である。

問4 ここでも日本語の表現とフランス語の受動態表現とのずれを認識し、両者を結び付ける必要がある。そこを見落とすと、sans ses parentsという結び付きに固執するなどの誤答もありえよう。見かけ以上に難しい問題である。

問5 「ni A ni B」という語法を知っていれば容易に正答に行き着く。良問である。

第7問 情報処理能力を問う問題で、与えられた情報から判断し発信できるかが問われている。今年度はA「牧場訪問の社会科学」、B「短期語学研修プログラム」が主題に取り上げられていて、話題としては受験者にとって取り組みやすいものであった。

A問1 会話文の空所補充。aについては、小遣いの上限金額と、そこに入場料分は含まれないという但し書きを読み取れるかどうか、bについては、予定表の中の雨天時の記述を読み取れるかがポイント。前者はconcerner、後者はremplacerというそれぞれの動詞の意味をきちんと理解する必要がある。

問2 予定表を時系列に注意して読んでいけば難しくない。

問3 資料とは別の表現で記述されているものを内容的には同じであると理解し、複数の情報を組み合わせて判断する必要がある。よく工夫された問題である。

B問1 まず、二人が2500euros以上を望まず、ホームステイを希望していることからbが「東京」だと分かり、プログラムの内容からaが分かる。「福岡」のプログラムにもdébutants, séjour en familleの表記があるので、落ち着いて読み取る必要がある。

問2 ①のla capitale du JaponをTokyoと読み替えるのは問題ないとしても、②のune expérience professionnelleと「京都」プログラムの説明にあるun stage dans une entreprise localeが同じ内容を表すことを理解する必要があり、容易ではない。③は、希望する4月がプログラムに無いことを読み取る必要がある。「見つけられない人」を選ぶことも注意が必要。

問3 消去法で正解に行き着くことが出来る。

問4 授業時間の合計が18hであることから、「長野」か「京都」。週末に予定が組まれるのは「長野」。2つの要素を順序立てて確認することが必要。

第8問 文意を捉えられているかの理解レベルを細かく測れる長文読解問題である。今年度は塩を主題としたエッセイであった。身近な素材であり、歴史的なエピソードも興味深い。

問1 a は1文目のuniverselという形容詞に注意すれば、globeを選べるし、 b は前文の内容を理解できれば、自然に優等比較級を選べる。

問2 後続のverser leur salaire aux soldats (...)を読み取れば正解に行き着く。D'ailleurs以下の部分も判断の助けになる。

問3 この段落中の内容を理解していれば、難しくない問題。「税金逃れ」という行為が受験者には読み慣れないトピックである可能性はあるが。

問4 observerという動詞が導きの糸となって、内容把握に至ることが出来る。

問5 空所直前の内容「塩が金と同じ価値を持っていた」と、空所直後の内容「塩は金の価値を持っていなかった」が正反対であることに気付ければ、「逆接」の内容の語句が入ることが分かる。選択肢同士も意味が明確に分かれていて、その点で迷うことは考えにくい。良問である。

問6 後続の文の内容から判断すれば（「とりわけ塩は～に役立っている」）、空所でポジティブな内容が入ることが推測できる。

問7 内容一致問題は、各文が簡潔に表現されるため、名詞構文であることが多い。名詞の正確な読み取りがポイントとなる。劣等比較級や、数字表現など、冷静に読み取ることが大事である。

問8 「本文全体」のタイトルという点がポイントであり、一部の内容を強調するだけでは十分とは言えない。文全体の理解が要求される問題である。

3 結 び

全問にわたって、基本的な問題、例外を扱った問題、応用力を必要とする問題、読解力を必要とする問題がバランス良く出され、素直にフランス語を読み、それに自分の経験、体験を生かして解答を求められる傾向が見られた。難解な文を読ませたり、特殊な語彙、例外的な文法事項を問う設問ではなかったが、そのため、受験者にとっては、かえって自分が学習してきた知識を正確に問われる設問となった。知識として定着していなかった部分が的確に問われ、指導者側も更に正確に、確実に指導すべきところがあぶり出される結果であると受け止めている。今まで学習した文法事項、語彙力を問うだけでなく、それを生かして読解し資料を利用して答え、更に表現を求める方向が、まさに「共通テスト」の目指す内容であった。

また、特別な海外生活体験を持たずに、学校の授業でのみフランス語を学んできた生徒たちが十分に対応できる問題であったと言える。

今後もこのような良問が出題される事を期待する。受験者数が少ないにもかかわらずこのような適切な問題を作ってください問題作成部会の方々に感謝申し上げます。

さて、フランス語を第一外国語として履修できる高等学校同士は、お互いに連絡を取り、情報を

共有するよう努力を続けている。どの高等学校でも目下の話題は、大学受験科目としての「フランス語」が今後どのようになっていくかである。

そのことと関係すると思われる、今年度の「フランス語」受験者数の減少に関して考えなければいけない。(今年度の本試験の受験者は93名だった。前年度受験者102名から9名の減少は、例年のフランス語受験者の1割近くの減少となる。6年前2017年の受験者数134名からは41名減となる。)今年度の受験者が中学3年生だった年は、「共通テスト」元年を目前に、大学入試全体が変わると広報され教育関係者がその対応に追われる日々だった。そのただ中で、今年度の受験者達が高校入学後の自分の第一外国語を決定する大きな節目を迎えていたことを思うと、将来への希望と不安のジレンマに常にも増して悩み深かった者がいたことは想像に難くない。世間には大学入試の改革が実施されると報道され、改革の詳細な内容は「英語」に関するものばかりになった。そのような中で、情報の少ない科目より、ある程度様子が知らされる「科目」、「英語」に受験者の興味が向いたというのは、自然なことではないだろうか。今年の「フランス語」受験者の減少は、ここに一因があるように思う。

また、多くの私立を含めた大学の理系学部がフランス語受験を行わないことと合わせて、最近の理系受験志向が強くなっていることも原因の1つであったと考えられる。さらに文系学部においても大学入試科目からフランス語独自試験をとりやめる動きがあり、現場でも焦燥感を禁じ得ない。私立大学に関しては特に、この「共通テスト」を活用していただくことで、大学の抱える問題を解決する方向に向かえるのではないだろうか。受験者の選択肢の幅を狭めないでいただけるよう、つまりフランス語入試の機会の維持存続を、切に希望する。

それと同時に、入学試験に「フランス語」を実施しない学校に誤解があると感じている。現在、大学入学後に読む「研究論文」「研究書」など英文で書かれたものが多いのは周知の事実である。また、「研究発表」なども英語で行われることが多いのも事実である。したがって、大学入学前に「英語」の一定程度以上の習得が期待されることは十分理解できる。しかし、「フランス語」を第一外国語に履修している生徒は、多くの場合同時に「英語」の履修もしている。大学に入り、本格的に英語学習を再開した時も、さほどの困難を感じないであろうと考える。1つの外国語学習で培われた能力は、別の外国語にも生かされることは、毎日の現場で度々経験することである。「英語だけ」を学習した生徒よりも、「英語も」学習した「フランス語」受験者は、物事に対してよりグローバル的視野を持っていると言える。

加えて申し上げると、あえて英語に加えてフランス語を学ぶという、更に十分な忍耐力と知的好奇心が要求される選択をする生徒には、ユニークな生徒が少なくないというのが高等学校の現場にいる教員たちの実感である。

そうした学習意欲の高い生徒の受験機会が増加に転じることで、「フランス語」受験者が増加し、大学に一層の多様性がもたらされることを願う。「共通テスト」で多言語試験を実施することは、日本の教育のグローバル化を進める一助になる、と確信する。

この場をお借りして大学関係者の方々にお願いする。共通テストは、受験者の実力をはかる識別力の高い問題である。その共通テストを現在のみならず将来のフランス語学習者のためにも、大学教育の入口として今後も幅広く実施・利用していただきたい。